

Title	『序曲』の改訂とワーズワスの数学
Author(s)	池田, 景子
Citation	Osaka Literary Review. 51 P.19-P.35
Issue Date	2013-01-31
Text Version	publisher
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/24624">https://doi.org/10.18910/24624</a>
DOI	10.18910/24624
rights	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

# 『序曲』の改訂とワーズワスの数学<sup>1</sup>

池田 景子

## I. 序

『抒情民謡集』(*Lyrical Ballads*)の序文でウィリアム・ワーズワス(William Wordsworth)は science を “a personal and individual acquisition, slow to come to us” と定義する(752)。<sup>2</sup>これだけを見ると、science と「直接的で人間に必須な」詩は対極にあるように見える。しかし、存外、彼にとって science は詩と近いものであったかもしれないのである。というのは、science も詩も喜びを人間の精神に喚起させる点で共通しているからである。

D.G. ジェームズ(D.G. James)など初期の批評家らは『逍遙』(*The Excursion*)第4巻におけるワーズワスの scientist 批判を受け、彼の science 観に批判の意図や無関心の極印を押してきた(James 164-69; Moorman 582-85; Ross 43)。このようなワーズワスの science 観は1950年代以降にようやく修正され始め、1970年代以降にはワーズワスの伝記的背景から数学への関心の高さに主眼を置く論が目につくようになる。しかし、ジェフリ・デュラント(Geoffrey Durrant)を除いて、ワーズワスと数学を本格的に考察し始めるのは80年代に入ってからである(Abrams 309-310; Durrant 20-31; Priestly 73)。だが、ワーズワスにとっての数学の位置づけに関しては、未だ決まり手となる論のないまま、ここ10年間閑却されている感がある。例えば、90年代にはマリリン・ゴール(Marilyn Gaul)は当時の数学界の動きに目を配り、晩年のワーズワスは幾何学に対して以前ほどの信頼を寄せ無くなったと指摘する。ところが、『序曲』(*The Prelude*)や『逍

遙』の後半において数学への言及が見られなくなっている一方で、ワーズワスの書簡における記述から彼の数学への関心の高さは十分に認められるのである。本論では、当時の数学界の動きとともにワーズワスと数学者ウィリアム・ハミルトン (William Rowan Hamilton) の交流に着目し、ワーズワスを魅了した幾何学の側面を検証する。この検証を踏まえて『序曲』第11巻以降で数学への言及が見られない理由を探りたい。まず、数学の名称が『序曲』の改訂に従って書き換えられている点に注目する。次に、数学の真理に適用される天文学的比喩がこの書き換えに無関係ではないことを検証していく。<sup>3</sup>このような検証からワーズワスが詩の中で数学の魅力を描く試みの意味を考え、彼のインスピレーションの本質に迫りたい。

## Ⅱ. ワーズワスと幾何学の因縁—ハミルトンとの交流

『序曲』でワーズワスが数学に言及するのは、第5巻、第6巻、第10巻である。作者の自伝的要素が濃厚な『序曲』において、第5巻、第6巻は青年期の、第10巻は仏革命に挫折し数学に慰めを求めた時期のワーズワスの経験にほぼ対応する。事実、ワーズワスと数学を結ぶ因縁は青少年期の学校教育、及び晩年における数学者ウィリアム・ハミルトンとの交流にある (Enros 138; Schneider 5)。特に『序曲』第5巻で言及されるユークリッドの『幾何学原本』 (“Euclid’s Elements” [V.88]) は、ワーズワスがケンブリッジ大学やホークスヘッド (Hawkshead) の Grammar School で受けた数学教育を色濃く反映している。だが、『序曲』の改訂における数学の呼称の変化を検証するのに重要なのは、ハミルトンと交流のあった晩年である (Batho 27)。

ハミルトンからワーズワスへの影響を論ずる前に当時の数学界の動きを概観すると、19世紀のフランスは従来の数学研究が重視してきた幾何学に代わり、代数が台頭しつつあった (Gaul 127-29; Enros 135-48; Kline 614; Garland 28-51)。現代の数学者、モリス・クライン (Morris Kline) の数

学史概説によれば、少なくとも 1550 年までには代数が台頭し、特に 1700 年以降の数学界では数学は自然界の現実 (“physical reality”) を解き明かすことを目的にはしなくなった。つまり、議論の抽象度が高くなったがゆえに数学の研究対象は自然から離れていったのである (Kline 392-93; Garland 37)。

このような数学の抽象化に、恐らくワーズワスの友人ウィリアム・ハミルトンも意識を傾けていたのだろう。彼はワーズワスとの対話の中で次のような主張をする。

[...] he [Hamilton] told Wordsworth that *he* [Hamilton] believed Mathematics to be connecting link between men and beings of a higher nature; the circle and triangle he believed to have a real existence in their minds and in the nature of things, and not to be a mere creation or arbitrary symbol proceeding from human invention. (Graves 1:314)

ハミルトンは数学者として代数の発展に寄与していたが、彼の “not to be a mere creation or arbitrary symbol proceeding from human invention” の裏には、自然界から独立した “arbitrary” な数学 (代数) への批判の色が窺われる (Garland 38)。つまり、数学における図形 (円や三角形) は人間の発案した “arbitrary symbol” でなく (Graves 1:34)、物の本質を必然的に表わしているため “physical investigations” に直結するというわけなのである (Kline 393)。だが、こういったハミルトンの考えは代数の台頭に伴って数学が自然界から乖離しつつある当時の数学界の潮流とは対蹠点にある。以下のセクションでは、このハミルトンの意見にワーズワスが同調し、彼の数学観が作品の中で具体化されていることを検証したい。だが、その前にワーズワスにとって数学を含めた science と詩が類縁であることを確認していく。

### Ⅲ. 数学における form

ワーズワスがハミルトンと数学に関して議論を交わしたのは1829年の8月のことである。この際に両者が意を共有したのは science と詩的想像力の類縁性である。ハミルトンはワーズワスの『逍遙』第4巻における scientist 批判を話題にして、the man of science として理性 (Intellect) の擁護に回るのである。ハミルトンは想像力が人間に欠かせない要素だと認め、science における知性が想像力と同等と考えていた (Graves 1:314)。ワーズワスも人間の想像力をつぶそうする science を痛烈に批判していたが、精神を神へ引き上げてくれる science には敬意を払っていた (Graves 1:313)。このとき彼は science の特長を “the purpose of elevating the mind to God” とみなしている (Graves 1:313)。だが、興味深いのは彼が『序曲』で想像力の源を “the God / Of nature” としている点である (VIII.436-37)。つまり、ワーズワスにとって、science も詩も神の領域に関わる点で近いものであったのである。

ハミルトンもワーズワス宛ての書簡、詩、レクチャーなど随所で science の役割を地上と天上を繋ぐものと繰り返し定義している (Graves 1:369; 1:504; 1:648)。特に、数学の理念について彼はワーズワスとの対話の中で “a connecting link between men and beings of a higher nature” としている (Graves 1:314)。ワーズワスはこのハミルトンの見解を温かく受け止め、プラトン主義を連想したと言う。彼の言うプラトン主義とは以下の通りである。“the Platonic doctrine of the internal existence in the marble of those beautiful forms from which the sculptor was supposed only to withdraw the veil” (Graves 1:314)。つまり、数学が物の本質を見出して高次の精神へと人間をつなぐ姿勢は、ワーズワス流に言い換えると、自然の中からプラトンのアイデアに類する form を見出すあり方なのである。しかし、ワーズワスが彫刻家の比喩を用いた一節はふたつの解釈—彫刻家が美の造形として “beautiful forms” を彫り刻んでいく姿、そして彫刻家が

“beautiful forms”を素材 shape の中に見出していく姿—を可能にする。すなわち、“beautiful forms”の〈form〉には事物の外郭(“shape, configuration” [OED, n., 1. a.])とプラトニックな〈イデア〉(“[t]he essential determinant principle of a thing” [OED, n., 4. a.])につながるもの、と二重の意味を内包することになる。

*Romantic Paradox* においてコリン・クラーク (Colin Clarke) は、ワーズワスが『序曲』や「ティンターン寺院」(“Lines Composed a Few Miles above Tintern Abbey, on Revisiting the Banks of the Wye during a Tour, July 13, 1798.”)などの作品中で〈form(s)〉に自然の“visible aspects”と“ideal shapes”といった二重の意味を込めていることを指摘する(40)。実際、クラークはハミルトンの伝記におけるワーズワスの発言には論及してはいない。だが、ワーズワスは全般的に〈form(s)〉を事物の外郭とプラトンのイデアの二重の意味で用いていた。そうすると、ハミルトンとの対話で“beautiful forms”を用いたワーズワスもまた、『序曲』や「ティンターン寺院」において〈form(s)〉に二重の意味を内包させた時のワーズワスと考えてもよからう。ワーズワスは自然からインスピレーションを得て詩作をする際に自然の外郭(form[s])を重要視しており、自然の外郭(form[s])から真理を解き明かす幾何学のあり方に彼が魅了されたとしても偶然ではない。彼にとって自然と幾何学は必然の関係であり、自然の外郭への観察は幾何学の研究に通じていたのである。

このようなワーズワスの幾何学に対する見解は、『逍遙』第1巻で具体化される。語り手の友人、〈さすらい人〉(Wanderer)が体験する自然や幾何学との関わりは、『序曲』で提示される語り手の物語と同様に、ワーズワス自身の経験をもとに書かれていると見てまず問題ないだろう。この〈さすらい人〉は青少年期における自然との交流と幾何学の勉強を並列して描いている。彼によると、自然から受けた心地よい影響が精神に入っていく様は“with her [Nature] hues,/ Her [Nature] forms, with the spirit of

her [Nature] forms,/ He [Wanderer] clothed the nakedness of austere truth” だという (L288-90)。このように自然の外郭 (“her forms”) から〈さすらい人〉は “austere truth” に関わっていく。その直後、〈比較・対照〉を表わす接続詞 “while” によって、彼と幾何学の関わりは自然との交流経験とともに並置されるのである。

While yet he [Wanderer] lingered in the rudiments  
Of science, and among *her* simplest laws,  
*His triangles* – they were the stars of heaven,  
The silent stars! [...] (L291-94 emphasis added)

この少し前の詩行では〈さすらい人〉が少ない稼ぎの中から本を購入し、science の勉強に耽る。購入した本の中に “books that explain / The purer elements of truth involved / In lines and numbers” (L273-75) があるため、この science は特に数学 (幾何学) を暗示している。だが、彼の幾何学への関心は自然観察にも適用されていく。幾何学の基礎 (“rudiments”) に夢中になった彼は、「その最も簡単な法則」 (“her simplest laws”) の中で「自分の三角形」 (“His triangles”) へと目を向ける。しかし、この三角形の正体は天上の星 (“the stars of heaven” [おそらく3つ星のオリオン座]) であり、その形状が “His triangles” と喩えられているのである。

このように、幾何学における視覚的側面はワーズワスの自然観察に適用されている。しかし、彼は女性代名詞を用いることでより効果的に幾何学と自然観察の接続を効果的に描いている。彼によると、「最も簡単な法則」 (“her simplest laws”) の中で見出されたのは三角形 (“His triangles”) をした天上の星である。“her simplest laws” の直前を見ると、代名詞 her は science を指示しているように見える。しかし、その直後 “His triangles” が天上の星を意味するとなると、代名詞は自然を指示しても不思議ではな

い。慣習上、自然も science もともに女性代名詞によって指示され得る。女性代名詞 her は自然と science の二重の意味を包含しつつ、次の詩行で突如として“His triangle”の his へと転換される。だが、「彼の」頭の中では幾何学の三角形と自然の星の形状が保持されたままなのである。つまり、ワーズワスは幾何学から自然描写へとすり替えを敷衍的に行いつつ、三角形といった図形の〈form〉から自然の中にある三角の〈form〉をしたオリオン座へ言及を移し、幾何学における〈form〉を自然観察にのべ広げているのである。

#### IV. 『序曲』の改訂—abstractions の加筆

『序曲』第6巻でも、幾何学と自然の外郭の関係は恣意的ではない。ワーズワスのペルソナである語り手は、ケンブリッジ時代に幾何学の研究から喜びを享受し、“Mighty is the charm / Of those abstractions to a mind beset / With images, and haunted by itself”のように表現する (VI.178-80)。この一節で彼は、form に極めて近い意味の image と幾何学とを結びつけ (Clarke 13)、それを幾何学の魅力としているのである。さらに、これより少し前の詩行で幾何学と自然の結びつきはさらに強調されている。

[. . .] did I mediate  
 Upon the alliance of those simple, pure  
 Proportions and relations with the frame  
 And laws of Nature – how they would become  
 Herein a leader to the human mind [. . .] (VI.143-47)

引用における “those [the elements of geometric science][. . .] relations with the frame [. . .] of nature” に注目すると、幾何学の比率や相似は自然の骨組みや法則と類似しているという。つまり、幾何学における主題は自然の



観察につながるのは明白である。ところが、ここで問題がひとつ浮上する。この05年版の“those [...] relations with the frame [...] of nature”が50年版では“the relation those abstractions bear”に書き換えられているのである（*Prel.50* VI.123）。また、『序曲』第10巻でも、05年版テキストにおける“mathematics”（X.904）は50年版で“abstract science”（*Prel.50* XI.328）に修正されている。ゴールが指摘するように、これらの加筆からは、晩年のワーズワスが代数の台頭を敏感に察知して数学を〈単なる〉抽象的学問領域とみなし、以前ほどの関心や信頼を寄せなくなっていたかのような印象を受ける（Gaul 129）。ところが、1833年2月8日ハミルトン宛の書簡でワーズワスは数学の勉強を疎かにしてきたことを反省する（*LWD* 2:641）。<sup>4</sup>彼はハミルトンに詩・宗教・政治の他に個人的な話題も口にするほど親交を深めており（Graves 2:44）、書簡は単なる社交辞令ではなく、数学への関心の高さから出た言葉とすると、ゴールの解釈は容易に受け入れ難い。

加筆のプロセスをより綿密に検証するため、1820年までに加筆・修正されていくテキスト編集のプロセスを収めた、マーク・リード（Mark Reed）編集の *The Thirteen-Book Prelude* を参照したい。これによると、第10巻における mathematics から abstract science への書き換えはすでに1805年末～06年の初め頃になされている。<sup>5</sup>例えば、青年時代のワーズワスが感じた幾何学の魅力は05年版のテキストで既に“the charm / Of those abstractions”と表されている（VI.178-80）。そうすると、第10巻で abstract science に書き換えられた「数学」も特に幾何学を示唆していると言える。また、ワーズワスはかなり早い段階から幾何学を abstract science / abstractions で呼び習そうとしていたことも読みとれるのである。

これまで〈abstract〉の意味をよく吟味せず、機械的に〈抽象〉としてきた。先行研究の中で、例えばゴールはこれを“unrelated to human experience of the real world”（129）としている。*OED* によれば、ゴールの用

いた意味に近いものとして “Withdrawn or separated from matter, from material embodiment” とあり (*OED*, adj., 4. a.)、名詞形の abstraction も同様である (*OED* n., 3.)。しかし、前述の通りワーズワスは幾何学と自然界との必然の関係性に着目していたとすると、これは先ほどのゴールの説や、*OED* の定義とは矛盾している。つまり、ワーズワスの用いる abstract /abstractions には別の含意があるはずである。

『序曲』第6巻の50年版テキストにおける修正箇所の周辺に目を向けると、幾何学の真理は人間の精神に働きかけるありようを星や宇宙の不変な真理にたとえられ、“From star to star, from kindred sphere to sphere, / From system to on system without end” とされている (*Prel.50* VI.127-28)。この加筆された2行は天文学的比喩を匂わせながら幾何学の真理の不変性を表わしており、第5巻にもこれに類する表現がある。語り手は幾何学の本を星に関するものとして “The one that held acquaintance with the stars” (V.104) と紹介する。この一節で、彼は幾何学を “undisturbed by space or time” としており (V.106)、時空に影響を受けない、永遠の不変性があることを特徴であると強調する。同様に、50年版テキストでワーズワスは仏革命で精神的挫折を経験し、数学(幾何学)が “abstract science” として時空の影響を受けることなく慰めを与えることになる (XI.328-33)。この不変性は *OED* で abstract を定義する所の “Ideal” に近い (*OED*, adj., 4. b.)。トーマス&オーバーは、ワーズワスの第6巻における “abstractions” (*Prel.50* VI.123) の加筆がハミルトンからの影響だと指摘するのである (Thomas and Ober 132-33)。

先述したように、ワーズワスにとって、数学を含めた science も詩も神の領域に関わる点で、近しいものであったはずである。ところが、彼は『序曲』11巻以降、数学(幾何学)への言及をしていない。「詩人の魂の成長」を物語る『序曲』の後半において幾何学への言及が見られないのは、幾何学がワーズワスの詩的想像力には不要な存在として切り捨てられたかのよ

うな印象すら受ける。この点を吟味するために、以下のセクションでは彼が幾何学の特性として描いた永遠の不変性をさらに詳しく検証することにする。

## V. 天文学的比喻

ワーズワスにとって数学(幾何学)の真理は時空によって影響を受けず、不変である。彼はこれを“undisturbed by space or time” (V. 106)、あるいは“the disturbances of space and time [...] find no admission”と表現している (Prel.50 XI.330-33)。本論ではワーズワスと数学者ハミルトンとの交流に光を当てて論を進めてきたが、幾何学に時空への意識を重ねたワーズワスの意図を解するにはもうひとりの scientist を持ち出す必要がある。それはアイザック・ニュートン (Sir Isaac Newton) である。ワーズワスはハミルトンとの対話の中で18世紀の時空論に多大な影響を及ぼした人物としてニュートンへの尊敬の念を垣間見せている。同様に、ハミルトンもまたニュートンを天文学者として崇拜し、その思いを詩に託してワーズワスに書き送っていたのである (Graves 1:265; Thomas and Ober 120)。ゆえにワーズワスの『序曲』において、数学、ハミルトン、ニュートン、天文学は線条的に繋がっていても不自然ではない。

『序曲』において数学(幾何学)は天上の星と結びつき、“The one that held acquaintance with the stars” (V.104)、または“From star to star, from kindred sphere to sphere, / From system on to system without end”として (Prel.50 VI.127-28)、天文学のモチーフを匂わせている。特に『序曲』第3巻50年版ではワーズワスはニュートンへの尊敬が天文学のモチーフとともに強調されている。

The Evangelist St. John my patron was:

[.....]

Near me hung Trinity's loquacious clock,  
 Who never let the quarters, night or day,  
 Slip by him unproclaimed, and told the hours  
 Twice over with a male and female voice.  
 [.....]  
 And from my pillow, looking forth by light  
 Of moon or favouring stars, I could behold  
 The antechapel where the statue stood  
 Of Newton with his prism and silent face,  
 The marble index of a mind for ever  
 Voyaging through strange seas of Thought, alone. (*Prel.50* III.46-63)

トリニティ・カレッジの時計と月と星の光に照らし出された大理石のニュートン像は対照の妙である。15分毎に時を告げるカレッジの時計は秩序だった時間を刻み、大理石の胸像は悠久の時に思いを巡らす。時計の秩序正しい時間と大理石の胸像が抱えるプリズムはニュートンによる時空の壮大な統一を具体化する (Durrant 7)。しかも、ニュートンの胸像は月と星の光によって照らしだされ、ニュートンの宇宙時間を想起させる効果を挙げている。この詩行における月と星への言及は、幾何学の真理を天文学的モチーフで彩った第5巻や第6巻の詩行を連想させる (V.104; *Prel.50* VI.127-28)。ワーズワスは幾何学への言及の際にも、ニュートンの時空論にある程度意識をしていたはずである。ニュートンは、微積分の発明者として代数の発展に寄与した人物であり、ワーズワスの幾何学とは相容れないように見える。しかし、ニュートンの著書である *Principia* が17世紀以降に発達した分析的数学ではなく、ギリシア時代からの幾何学をもとにして書かれている (Gillispie 140; Kline 392)。

では、幾何学への言及が第11巻以降見られない理由とは何だろうか。

そもそも第10巻以降においてワーズワスは妹ドロシー (Dorothy Wordsworth) との邂逅を果たし、ドロシーとコウルリッジ (Samuel Taylor Coleridge) は『序曲』にとって大きな影響を及ぼす重要人物となる (LWD 2: 535-36)。彼らの存在は、「詩人の成長」物語を描く『序曲』にとってハミルトンやニュートンを凌ぐ重要性を占めていた。さらに、『序曲』の終盤で語り手の体験した “spots of time” はニュートンの時空論とは一致しない (XI.258)。ニュートンの時空論は『序曲』第3巻の例に見たように、時空を凌駕する不変性を特徴としている。他方で、ワーズワスの言う “spots of time” はまさに子ども時代にこそ顕著で (XI.277-79)、この過去の体験から影響を大きく受ける。なぜならこの体験は “the disturbances of space and time” に左右されるからである (XI.330)。これは明らかに『序曲』第10巻における数学 (幾何学) の不変性と反している。では、『序曲』第11巻以降でワーズワスが幾何学に言及していないのも、最終巻における詩的啓示のクライマックスに必要なのは “spots of time” であり、数学ではなかったと結論付けたい誘惑に駆られる。しかし、上に挙げた理由づけに対し、われわれは反証を挙げることができる。

第一に、ワーズワスが “The only man like Coleridge whom I have known is Sir William Rowan Hamilton, Astronomer Royal of Dublin” と漏らしているように (PWW 492)、<sup>6</sup> 晩年のワーズワスにとってハミルトンはコウルリッジに匹敵する存在だった (Thomas and Ober 128)。ハミルトンとの交流、そしてハミルトンから触発された数学 (幾何学) への関心は、たとえ直接的言及が見られないとしても、『序曲』の地下水脈として物語の終わりまで連続と流れていると考えてもよいのではないか。第二に、“spots of time” を描いた『序曲』第11巻は「詩人の成長」物語における分岐点であり、クライマックスではない。自然界との必然的關係性といった点においてワーズワスは数学／幾何学／天文学と詩的創造の間に類縁性を嗅ぎ取っていたのではないか。この数学的／幾何学／天文学的含意は、『序曲』

のクライマックスである最終巻の、スノードン山での場面に見出られるのである。

50年版によると、スノードン山に登攀した際に語り手は詩的啓示を受ける直前に深い霧に包まれ暗中模索する中、一筋の月光に足元を照らされる。このように、月光と詩的啓示の瞬間をパラレルに描いた場面において〈月〉が語り手の詩的啓示を導く役割を担っていることに注目したい。月明かりの下、語り手は“abysmal [...] breathing-place”と呼ぶ岩の割れ目から耳にした水音を (*Prel.50 XIV.58*)、最終的なヴィジョンの“silent light”へ連続させていく (*Prel.50 XIV.73*)。この水源となる深淵に関わる詩行において50年版では “[the full-orbed Moon] Heard over earth and sea, and in that hour, / [...] felt by the starry heavens.” とある (*Prel.50 XIV.61-62*)。月明かりのもと深淵からわき上がる水音が神への思いを強めるシナリオとなっている。ここには当時 Moon が star の一部と考えられていた天文学的含意があり、ハミルトンとニュートンからの影響を読み込むことは不可能ではない (Thomas and Ober 136-37)。

スノードン山の場面は第3巻で描かれるニュートン像に関する叙述と類似したイメージやモチーフが見られる。スノードン山で霧の海の中を暗中模索する語り手は、月光に導かれ詩的ヴィジョンに至る。同様に、第3巻でも語り手は月と“favouring stars”の下でニュートン像が安置されるアンテチャペルを眺めるのである (*Prel.50 III.59*)。さらに、このニュートン像は“Voyaging through strange seas of Thought, alone”であり、海のモチーフで彩られる (*Prel.50 III.63*)。この“Voyaging”は無論“seas of thought”とイメージの上で繋がるばかりではなく、当時の航海において星がその導きとなった点を踏まえているとすると (Thomas and Ober 141)、前出した“favouring stars”とも縁語となる。ここでスノードン山での月の役割に立ち返ると、類似した構造が見て取れる。第3巻で“favouring stars”がニュートンにとって導き手であったのと同様に、スノードン

山でのワーズワスもまた霧の海の中で月に導かれ、詩的啓示へと向かうのである。

トーマス&オーバーは第3巻におけるニュートン像とスノードン山における詩的啓示の瞬間に関わる書き換えにハミルトンからの影響を読み込んでいる。月明かりのヴィジョンの後で詩的啓示に至った語り手の言及する“a majestic intellect”は (*Prel.50 XIV.67*)、50年版の“a mighty Mind”からの書き換えであり (*XIII.69*)、晩年のワーズワスがコウルリッジと同様に親しくしていたハミルトンを暗に示唆しているというのだ (Thomas and Ober 138)。確かに、05年版における mind から50年版における intellect への書き換えは science/scientist への連想を強めている。また、この“a majestic intellect”は (*Prel.50 XIV.67*)、続く詩行で“the emblem of a mind / That feeds upon infinity”と言い換えられる (*Prel.50 XIV.70-71*)。この“infinity”に培われる精神は時空に左右されない真理の不変性を連想させ、さらにこの精神は“ideal form”へと向かわせる超越した力を認識することで養われるという (*Prel.50 XIV.74-76*)。このように、“a majestic intellect”がプラトンのイデアへ向かうものとして描かれているのも偶然ではない。このような形で超越した高次の存在へと繋がる精神のあり方は、まさに数学／幾何学／science をめぐってワーズワスとハミルトンの交わした対話を連想させるのである。

## VI. 結び

数学者ハミルトンとワーズワスとの交流は晩年に始まって生涯途絶えることがなかったのは事実だが、『序曲』における“spots of time”と幾何学の真理はその特性において異なり、第11巻以降の語り手は若き日にあれほど熱中した数学に言及しなくなる。

ワーズワスが『序曲』において詩人の想像力の源を再発見し詩人としての再生を果たすシナリオを描く際に、数学は彼自身の詩の一部として消化

されてしまったのではないだろうか。むしろ、彼が詩人の立場から数学を眺め、受け入れ、改訂を重ねる度に自身の詩的創造に昇華させることができたのだろう。『抒情民謡集』1802年版の序文で、ワーズワスは詩人として science との関わり方を、キリストの〈変容〉の隠喩で説明する。その要旨を述べればこうなる。機が熟せば science は人間にとってなじみあるものとなって “a form of flesh and blood” を纏うようになり、この “transfiguration” を促すために詩人が “divine spirit” を傾けるべきなのである (LBP 753)。数学における自然との必然的関係性は『序曲』や『逍遙』においてプラトンのアイデアのモチーフを変奏したものであった。改訂を重ねるごとに、彼にとって数学は abstract の性格を強く帯びるようになっていき、最終巻では自然描写の天文学的／幾何学的の比喩としてその姿 (form) をかえて変容を果たしたのである。この変容を果たした『序曲』はワーズワスの詩的力量としての “divine spirit” の賜物と評価できる。

### Notes

- 1 本稿は日本英文学会関西支部第4回大会(2010年12月18日於大阪市立大学、杉本町キャンパス)での発表を加筆・修正したものである。
- 2 『抒情民謡集』(*Lyrical Ballads*)の序文1802年版 James Butler and Karen Green, ed., *Lyrical Ballads, and Other Poems, 1797-1800* (Ithaca: Cornell UP, 1992) に拠る。
- 3 『序曲』からの引用は、特に注記のない場合は便宜上セリンコート編集の1805年版テキストに拠る。また、50年版テキストを引用する場合、括弧内に *Prel.50*、巻・行数を明記する。
- 4 Ernest de Selincourt, ed., *The Letters of William and Dorothy Wordsworth: The Later Years*, vol. 2 (Oxford: Clarendon P, 1939) に拠る。以下 *LWD* 2:641 の如く略記。
- 5 William Wordsworth. *The Thirteen-Book Prelude*, ed. Mark L. Reed, vol. 2 (Ithaca: Cornell UP, 1991) 896.
- 6 Alexander B. Grosart, ed., *The Prose Works of William Wordsworth*, vol. 3 (London: Moxon, 1876) に拠る。*PWW* 429 の如く略記。



## Works Cited

- Abrams, M. H. *The Mirror and the Lamp*. New York: Oxford UP, 1953.
- Batho, Edith C. *The Later Wordsworth*. New York: Russell, 1963.
- Clarke, C. C. *Romantic Paradox: An Essay on the Poetry of Wordsworth*. London: Routledge, 1962.
- Durrant, Geoffrey. *Wordsworth and the Great System*. Cambridge: Cambridge UP, 1970.
- Enros, Philip C. "Cambridge University and the Adoption of Analytics in Early Nineteenth-century England." *Social History of Nineteenth Century Mathematics*. Eds. Herbert Mehrrens, Henk Bos, Ivo Schneider. Boston: Birkhäuser, 1981. 135-48.
- Garland, Martha McMackin. *Cambridge before Darwin: The Ideal of a Liberal Education 1800-1860*. London: Cambridge UP, 1980.
- Gaul, Marilyn. "Romantic Numeracy: The 'Tuneless Numbers' and 'Shadows Numberless'." *The Wordsworth Circle* XXII. 2 (1991): 124-30.
- Gillispie, Charles Coulston. *The Edge of Objectivity: An Essay in the History of Scientific Ideas*. Princeton: Princeton UP, 1960.
- Graves, Robert Perceval. *Life of Sir William Hamilton*. 3 vols. New York: Arno, 1975.
- James, D. G. *Scepticism and Poetry: An Essay on the Poetic Imagination*. 1937. London: Allen, 1960.
- Kline, Morris. *Mathematical Thought from Ancient to Modern Times*. Oxford: Oxford UP, 1972.
- Moorman, Mary. *William Wordsworth, A Biography: The Early Years 1770-1803*. Oxford: Clarendon, 1957.
- Priestley, F. E. L. "'Those Scattered Rays Convergent': Science and Imagination in English Literature." *Science and the Creative Spirit: Essays on Humanistic Aspects of Science*. Eds. Karl W. Deutsch, F. E. L. Priestly, Harcourt Brown. Toronto: U of Toronto P, 1958. 53-88.
- Ross, Marlon B. "Romantic Quest and Conquest: Troping Masculine Power in the Crisis of Poetic Identity." *Romanticism and Feminism*. Ed. Anne. K. Mellor. Bloomington: Indiana UP, 1988. 26-51.
- Schneider, Ben Ross. *Wordsworth's Cambridge Education*. Cambridge: Cambridge UP, 1957.
- Thomas, W. K. and Warren U. Ober. *A Mind for Ever Voyaging: Wordsworth at Work Portraying Newton and Science*. Alberta: U of Alberta P, 1989.
- William Wordsworth, *The Prelude: or Growth of a Poet's Mind*. Ed. Ernest de Selincourt, 2<sup>nd</sup> ed. rev. Helen Darbishire. Oxford: Clarendon, 1959.
- . *The Excursion*. Ed. Sally Bushell, et al. Ithaca: Cornell UP, 2007.
- . *Lyrical Ballads, and Other Poems, 1797-1800*. Eds. James Butler and Karen

- Green. Ithaca: Cornell UP, 1992.
- . *The Thirteen-Book Prelude*. Ed. Mark L. Reed. 2 vols. Ithaca: Cornell UP, 1991.
- . *The Letters of William and Dorothy Wordsworth: The Later Years*. Ed. Ernest de Selincourt, vol. 2. Oxford: Clarendon, 1939.
- . *The Prose Works of William Wordsworth*. Ed. Alexander B. Grosart, vol. 3. London: Moxon, 1876.